

六 半途聞き、胡魔化し聞き

人の噂にも幾分の眞理はあらうが、さりとて之にばかり拘泥り果てゝは、到底何事も出来ませぬ。一旦自分の主義方針を定めた上からは、何處々々までも之を貫徹せしめねばなりません。一心は何にでも必要である。一心になつて出来ぬことはない。一滴々々の雨垂が石を穿つのも、屈托なく落ち通すからのこと。日光も一點に集むれば、能く木を焦し火を出す。強い者も力を分ければ弱くなり、弱い者も一つに固まれば強い道理。世に一心ほど恐ろしいものはない。力の弱きを歎ずる勿れ、仕事の出来ぬを悲しむ勿れ。一心になれぬのを残念に思へ。道に進んで道を求むる、難中の難とは、この一心になれぬ人のことである。一心正念にして、本願一實の白道に邁進する。そこに易行易修の大道は展開せらるゝのであります。

世には迷信と云はるべき種々の雑行雑修がある。「延命を祈る間も減る命」祈つても焦つても、命は減るだけは減る。その代り無闇に減りはせぬ。とはいへ、うつかりすると無くなることはありませんぞ。世の毀譽褒貶に耳をかして、自分の執るべき最善の道を忘れてはならぬ。「火と水とその中道をゆけよ人、來れと喚ばふ聲をしるべに」。「攝取不捨の眞言、超世稀有の正法、聞思して遲慮すること莫れ」如來の仰せ一つを聞きさへすればよい。そして徹底して底に届く聞方をするのであります。彼方に聴き、此方に聞き、自督の可否につき去就に苦める人を、讃岐の庄松、論して曰く「佛照寺様も得雄寺様もお浄土は持つてござらぬ。其の持つてござらぬ人の言ふ事に迷はずと、御浄土を持つてござる佛様の仰せに順ふより、外に手はない」と。簡にして明、穿ち得て妙と申す外はない。

蓮如上人は、つねに聴聞はかどを聞けくと、仰せられましたが、聞法は

深く底を窮めねばなりません。山寺の和尚さん豆腐が好き。降つても照つても豆腐がなくては日が経たず、豆腐の買置はならぬので、毎日々々小僧を豆腐買ひにやる。通路に小店があつて、芋や大根を列べて居る。店の隠居さん、どつかと据り込んで居ても、一向買手が無い。隠居さん退屈まぎれに、何時も小僧を捕へて問答をしかける。「小僧さん何處へ行く」「町へ行く」「町は何處へ行く」毎日の事で解り切つて居るけれども仕方がない。答へぬ譯に參らぬ「豆腐を買ひに行く」と答へる。「今度の和尚は云何もならぬ、毎日く豆腐ばかり買うて、少しは芋や大根も買ひなはれと、云ふてくれ、前の和尚はよく買うてくれなさつたに……それでない」と今度は通さぬぞ」と、痛くやりこめました。サア大變明日から豆腐買ひに行けない。行けないとあつては第一師匠にすまぬ。止むなく翌日は打明けて、和尚さんの智慧を借りた。「よし、くそれでは、今度隠居が何處へ行くと問ふたら、俺は出家ぢや西方へ行く」と云へ。西方は何處へ行くと問ふたら極樂と云へ。「宜しうございます、今度は親爺みんごと遣ツつけてやります」と、和尚が「待て、くまだある」と云ふのも聞かず、小僧さん早速飛び出して仕舞つた。今日は前日に變つて大元氣だ。例の小店の前を知らぬ振りして通ると、隠居忽ち一聲。「小僧さん何處へ行く」。小僧は「くぞとばかり、俺は出家ぢや西方へ行く」。さて今日はチト様子が違ふぞ。「西方は何處だ」「西方は極樂へ行く」小僧さん得意満面。そこを隠居さんすかさず「極樂へ何しに行く」とやつた。しまつた其處迄は聞いて置かなかつた、云何しやう、エイ仕方はない「豆腐を買ひに行く」。聞きかぢりの半可通は、恚んな風になつて了ひます。

こんな場合に人は能く胡魔化しをやる。胡魔化して胡魔化し終せたら結構であらうが、そんな甘い調子にゆかぬ、結局自性を顯すことになる。香樹院

師し曰いはく「死しぬまいと思おもうて居をるうちに死しぬる。眞しん宗しゅうの者ものは地ぢ獄ごくへ墮おちはせま
いと思おもうて墮おちる。他た宗しゅうのものは業いがつよくて墮おちる。佛ぶつ法ぽうをしらぬものは
地ぢ獄ごくはありはせぬと思おもうて墮おちる」と。結けつ局きよく墮おちることは必ひつ定ていである。幾いく度たひ
もく人ひとに相あひ尋たうねて、愈い得とく心しんのゆくまで聞きいて安あん堵じの身みとならねばならぬ。